

モモの予備摘果

県北農林事務所伊達農業普及所
JAふくしま未来伊達地区モモ生産部会

**果実を肥大させるために重要な時期になります。
摘らい作業を軽くした園地では、より丁寧な予備摘果をお願いします。**

1 気象経過

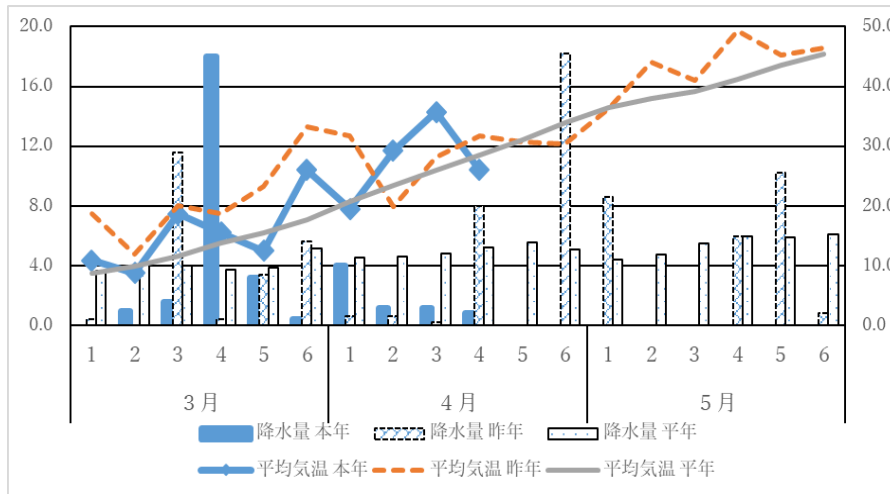


図1 平均気温と降水量の推移（観測地点：伊達市梁川町）

2 生育経過

管内の調査ほ場における「あかつき」の開花始めは4月10日であり平年より3日早く、満開は4月13日であり、平年より6日早かった。

表1 生育概況

(調査地：桑折町伊達崎)

品種	開花始め			満開		
	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年
あかつき	4/10	4/13	3/30	4/13	4/19	4/5
川中島白桃	4/11	4/13	3/31	4/13	4/19	4/8

3 栽培管理

(1) 「あかつき」の摘果時期の目安

作業内容	時期	備考
予備摘果	5月3日～5月13日頃 (満開後20～30日頃)	最終着果量の50%増とする。 (霜被害が大きい場合は着果量確保を優先する)
仕上げ摘果	5月23日～6月2日頃 (満開後40～50日頃)	最終着果量の20%増とする。
(硬核期)	6月3日～6月20日頃 (満開後51～68日頃)	障害果の発生を助長するので摘果作業を控える。

※摘果程度は樹勢等に応じて調整する。

※硬核期は満開後の気温が高く経過すると時期が早まるので注意する。

(2) 摘果

満開後に低温、降雨が続いたことから、花粉のない品種等結実が不安定な品種は結実を確認後に作業を開始してください。

【予備摘果】

目的: 果実の初期肥大を促進し、新梢の伸長を確保する。

時期: 満開後 20 日頃から実施する。

留意点: 結果枝当たりの着果数は、長果枝に 4～5 果、中果枝に 2～3 果、短果枝 2～3 本に 1 果を目安とする。なお、今年は満開後に低温、降雨が続いたことから、花粉の無い品種等結実が不安定な品種については、結実を確認後に作業を開始する。

表2 着果調節の目安

樹勢	予備摘果
強樹勢	最終着果量の2倍程度
普通	最終着果量の50%増
弱樹勢	最終着果量の20%増

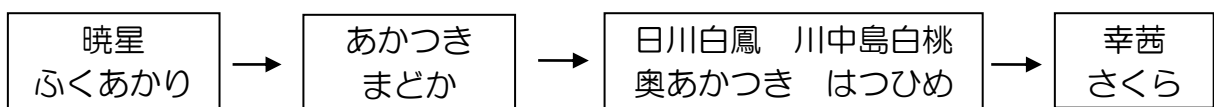
【予備摘果のポイント】

- ① 「暁星」「ふくあかり」等の花粉がある早生品種から作業に入る。生理落果や核割れの多い「日川白鳳」等は数回に分けて行う。
- ② 次に花粉がある中生品種で結実の良い「あかつき」「まどか」等の作業に入る。
- ③ 「川中島白桃」「はつひめ」等の花粉が無い、または少ない品種は、結実を確認してから作業に入る。結実量が少ない場合は仕上げ摘果を主体に行う。
- ④ 葉芽のある位置に優先的に着果させる。
- ⑤ 目通りの高さの着果量を 100 とすると、日当たりが良い上部は 110～120、下部や樹冠内部は 80～90 程度の着果量とする。
- ⑥ 樹勢の弱い樹は早めに着果量を制限し、樹勢回復を図る。樹勢の強い樹は、最終着果量の 2 倍程度を限度に果実を多めに残し、仕上げ摘果及び修正摘果で目標着果量に制限する。

表3 摘果の目安

結果枝	長さ	予備摘果
極短果枝	5cm以下	2～3本に1果
短果枝	5～15cm	2～3本に1果
中果枝	15～30cm	2～3果
長果枝	30～50cm	4～5果
極長果枝	50～100cm	葉芽当たり1果

【摘果の順序】



【長果枝・中果枝の摘果程度の目安】※樹勢普通(最終着果量の50%増)の場合

枝を上から見た場合の模式図

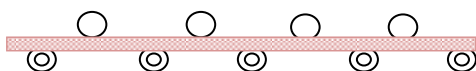
○: 残す果実 ◎: 摘果する果実

結果枝	長さ	予備摘果	仕上げ摘果
長果枝	30cm以上		
中果枝	15～30cm		

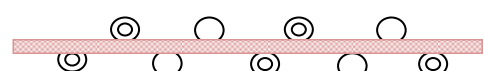
※予備摘果時に枝の長さ15cmに2個残すのが目安となる。

【倍量着果の場合】※縦に並べて残すのではなく、目標着果部位の左右に倍量を置く。

△仕上げで迷う



○正しい倍量



(3) 追肥の考え方

基肥追肥一発型肥料の「みらいろ物語もも基肥(12-10-3)」を基肥に使用した場合は、「あかつき」等の中生種までの品種では追肥の実施を控える。なお、「川中島白桃」以降の晩生種では、樹勢に応じて追肥を実施する。

(4) かん水の実施

満開から約1カ月は細胞分裂期に当たるため、晴天が1週間以上続くなど、土壌の乾燥が見られる場合は適宜かん水を実施する。なお、かん水ができないほ場では樹冠下マルチを実施するなど土壌水分の蒸散を防ぐ。

4 病虫害防除

これからせん孔細菌病の生育に適した気温が続くことから、発生が本格化します。薬剤散布、枝病斑のせん除等対策を徹底してください。

(1) 当面の薬剤散布

本年はモモの生育が平年に比べて早まっているため、表4の防除日程を参考に薬剤散布が遅れないように実施する。

表4 薬剤散布時期の目安（「あかつき」の満開が4月13日の場合）

散布回数	散布時期	主な対象病虫害	使用薬剤	濃度
第4回	落花10日後 (4月30日頃)	黒星病、灰星病 うどんこ病	ストロビードライフロアブル	2,000倍
		モモハモグリガ アブラムシ類	モスピラン顆粒水溶剤	2,000倍
		せん孔細菌病	クプロシールド クレフノン	1,000倍 100倍
5月1日頃		リンゴコカモンハマキ モモハモグリガ モモシンクイガ ナシヒメシンクイ	コンフューザーMM	100本/10a
第5回	5月10日頃	黒星病	イオウフロアブル	500倍
		せん孔細菌病	マイコシールド	2,000倍
第6回	5月20日頃	せん孔細菌病 黒星病	デランフロアブル	600倍
第7回	5月31日頃	せん孔細菌病	マイコシールド	2,000倍
		黒星病	チオノックフロアブル	500倍
		モモハモグリガ シンクイムシ類 ハマキムシ類 コスカシバ	フェニックスフロアブル	4,000倍

注1：上記の農薬使用法は令和4年4月19日現在の農薬登録内容に基づき記載した。

注2：散布回数の記載はJAの令和4年版果樹病虫害防除暦に準じた。

注3：展着剤は適宜加用する。

注4：その他の注意点はJAの令和4年版果樹病虫害防除暦に従う。

(2)モモせん孔細菌病対策

せん孔細菌病の春型枝病斑は見つけしだい、速やかにせん除し、適切に処分しましょう！

せん孔細菌病せん除重点期間：5月5日～5月10日

例年4月から発生が多くなることから、見つけ次第随時せん除する。

展葉後の葉に2次感染する前に、**春型枝病斑は見つけ次第必ずせん除**し、ほ場外に持ち出すか土中に埋める等適切に処分し、伝染源の密度低下に努める。

ア 1年枝の黒変や新梢葉の生育不良を目安に発病が疑われる枝は見つけ次第、切除する（写真1）。

イ 病斑から水滴により菌が移動している可能性があることから、短果枝は基部ごと、中長果枝は基部ごとまたは基部付近の葉芽まで切除する。

ウ 第4回のクプロシールド（クレフノン加用）を散布後、樹体が白く汚れるため春型枝病斑が見えにくくなる。そのため、散布前に春型枝病斑を切除する時間を設ける。

エ クプロシールドの使用上の注意点

(ア) 薬害防止のため、単用では使用せず必ずクレフノンを混用する。

(イ) クレフノンは直接SSのタンクに入れず、いったんバケツで完全に溶かしてから散布直前にタンクに入れる。

(ウ) クレフノンは薬害防止を目的としたカルシウム剤であり液肥の代わりにはならないことから、日持ち性向上等のカルシウム補給については、別途実施する。

(3) その他害虫対策

モモハモグリガ、ナシヒメシンクイ等の害虫の発生時期は、モモの生育と同様に早まっているため、薬剤散布が遅れないように注意する。



写真1 モモせん孔細菌病の春型枝病斑

◎近年増加している気象災害に備えるために、収入保険の加入を検討しましょう！

◎防除日誌への記載漏れの無いように農薬散布後は、忘れずに防除日誌へ記帳しましょう。

◎農薬散布の際は隣接する作物に注意し、飛散しないように注意しましょう！

◎適切な生産工程管理のためにGAPシートで確認しましょう

◎農作業事故に注意して作業を進めましょう！